ときがわ町埋蔵文化財調査報告第１集

村　内　遺　跡　Ⅲ

埼玉県指定史跡　小　倉　城　跡

第３次発掘調査報告書

本郭　北虎口東袖石積み遺構

２００７
埼玉県比企郡
ときがわ町教育委員会

郭 1　北虎口石積み両袖（南西より）

郭 1　北虎口石積み西袖（南東より）

口絵２

郭１　北虎口石積み西袖（南西より）

郭１　１号土塁内裾雛壇状石積み（東から）

北虎口通路第１トレンチ

１号土塁内裾雛壇状石積み（西から）

北虎口通路第２トレンチ

東虎口北脇４号土塁被災面

階段状遺構

４号土塁土層断面

口絵４

渥美大甕

火鉢

常滑甕

カワラケ

白磁・染付・瀬戸美濃製品

鑿痕のある緑泥石片岩剥片

序

ときがわ町は、平成１８年２月１日に都幾川村と玉川村の二つの村が対等合併して誕生した新しい町であります。埼玉県のほぼ中央、外秩父の山並みに発する都幾の流れに育まれてきた当町では「人と自然の優しさにあふれるまち　ときがわ」の実現を目指し、現在さまざまな施策を策定・展開中であります。

ここに報告する埼玉県指定史跡小倉城跡の調査も、小倉城跡の国指定化と整備活用を前提としたものであり、町に所在する文化遺産を継承し保全する中で新たな「ときがわ」の文化を創造する、まちづくりの取り組みの一つとして位置づけられております。

小倉城跡は大規模な石積みの所在する中世山城として高い評価を頂いておりますが、今次報告でも、益々そうした状況が鮮明となってきております。

調査の成果により、小倉城跡の具体的な様相が明らかとなり、関東地方における中世城郭研究や戦国時代研究に、一石を投じることとなるものと思われます。

本書が、文化財保護や生涯学習資料として、また考古学、歴史学、郷土史研究等の基礎資料として広く御活用いただければ幸いに存じます。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者並びに地元関係各位、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課、埼玉県嵐山史跡の博物館に多大なる御指導御協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

平成１９年３月

ときがわ町教育委員会

教育長　清　水　孝　一

例 言

1．本書は、埼玉県比企郡ときがわ町大字玉川字城山ほかに所在する、県指定史跡小倉城跡（県遺跡番号［旧玉川村番号］No.041－022　平成 19 年 3 月現在合併に伴う番号の統一ははかっていない）の報告書である。

2．発掘調査は文化庁国庫補助金・県補助金・村負担金をもって玉川村教育委員会が実施し、整理作業は玉川村教育委員会とときがわ町教育委員会が実施した。発掘調査並びに整理・報告書作成作業は平成 17 年 6 月 27 日から平成 19 年 3 月 31 日に亘った。

3．発掘調査・整理作業、本書の編集は石川安司が担当した。

4．発掘調査から本書作成に至る間に下記の方々、諸機関からご指導ご教示を賜った。銘記してお礼申しあげる。（五十音順、敬称略）

浅野晴樹、井上肇、伊藤正義、梅沢太久夫、太田賢一、小野正敏、栗岡眞理子、齋藤慎一、坂井秀弥、柴田龍司、杉山正司、関口和也、田中信、中島宏、西股総生、橋口定志、藤沢良祐、藤木久志、松岡進、水口由紀子、宮田毅、村上伸二、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県立歴史資料館、中世を歩く会

5．発掘調査及び整理作業員

村田悦子　小野田照子　池永文代　浅見元一　小島忠一　根岸マサ子　山崎尚子　蓮見寛子

目　次

Ⅰ　発掘調査の概要 - 1
1　平成１７年度調査の概要 - 1
2　発掘調査と報告書刊行事業の組織 - - - - - - - - - - - - - - - - - - - 1

Ⅱ　地理的・歴史的環境 - 2
1　地理的環境 - 2
2　歴史的環境 - 3

Ⅲ　遺構と遺物 - 6
1　北虎口 - 6
2　通 路 - 10
3　４号土塁 - 10
4　１号土塁 - 14
5　南虎口 - 15
6　上段第２虎口 - 18
7　上段第１虎口 - 21

小 結 - 23

挿図表目次

第１図　小倉城跡周辺図 - 2
第２図　小倉城跡全測図 - 3
第３図　小倉城跡周辺の主な戦国期板碑 - - - - - - - - - - - - - - - - - 4
第４図　平成１７年度郭１トレンチ配置図 - - - - - - - - - - - - - - - - 6
第５図　北虎口平面図（１） - 7
第６図　北虎口平面図（２） - 7
第７図　北虎口第１トレンチ東袖側面石積み立面図 - - - - - - - - - - - - 8
第８図　北虎口東袖正面立面図 - 8
第９図　北虎口西袖突出部立面図（左）・通路部立面図（右） - - - - - - - 8
第10図　北虎口遺物分布図 - 9
第11図　北虎口出土緑泥石片岩石材 - - - - - - - - - - - - - - - - - - - 9
第12図　北虎口出土遺物 - 11
第13図　通路第１トレンチ平面図・石積み立面図 - - - - - - - - - - - - 12
第14図　通路第１トレンチ出土遺物 - - - - - - - - - - - - - - - - - - 12
第15図　４号土塁第１トレンチ平面図・立面図 - - - - - - - - - - - - - 13
第16図　４号土塁第１トレンチセクション図 - - - - - - - - - - - - - - 13
第17図　４号土塁第１トレンチ遺物分布 - - - - - - - - - - - - - - - - 14
第18図　４号土塁第１トレンチ出土遺物 - - - - - - - - - - - - - - - - 15
第19図　１号土塁第３トレンチ石積み遺構 - - - - - - - - - - - - - - - 16

第20図　１号土塁第３トレンチ石積み遺構出土遺物 - 17
第21図　南虎口第１トレンチ - 17
第22図　南虎口周辺遺物分布図 - 17
第23図　１号土塁第２トレンチ石積み遺構出土板碑 - 18
第24図　南虎口第１トレンチ出土緑泥石片岩剥片 - 19
第25図　南虎口第２トレンチ出土遺物 - 19
第26図　上段第２虎口階段遺構 - 20
第27図　上段第２虎口階段遺構セクション図 - 20
第28図　上段第２虎口遺物分布図 - 21
第29図　上段第２虎口出土遺物 - 21
第30図　上段第１虎口第１トレンチ出土遺物 - 22
第31図　上段第１虎口遺物分布図 - 23

報告書抄録

<table>
<tr><td>フリガナ</td><td colspan="8">ソンナイイセキ</td></tr>
<tr><td>書名</td><td colspan="8">村内遺跡</td></tr>
<tr><td>副書名</td><td colspan="8">埼玉県指定史跡小倉城跡第３次発掘調査報告書</td></tr>
<tr><td>巻次</td><td colspan="8">Ⅲ</td></tr>
<tr><td>シリーズ</td><td colspan="8">ときがわ町埋蔵文化財調査報告</td></tr>
<tr><td>巻次</td><td colspan="8">第１集</td></tr>
<tr><td>編著者</td><td colspan="8">石川安司</td></tr>
<tr><td>編集機関</td><td colspan="8">ときがわ町教育委員会</td></tr>
<tr><td>所在地</td><td colspan="8">〒355-0395　埼玉県比企郡ときがわ町大字桃木３２番地</td></tr>
<tr><td>発行日</td><td colspan="8">2007年3月31日</td></tr>
<tr><td>ふりがな
所収遺跡</td><td>ふりがな
所在地</td><td colspan="2">コード
市町村</td><td>遺跡</td><td>北緯</td><td>東経</td><td>調査期間</td><td>調査面積</td><td>調査原因</td></tr>
<tr><td>おぐらじょうあと
小倉城跡</td><td>さいたまけんひきぐん
埼玉県比企郡
たまがわむらおおあざたぐら
玉川村大字田黒
あざしろやま
字城山１１８４</td><td>１１３４９</td><td>０２２</td><td>３６度
１分
４３秒</td><td>１３９度
１７分
５５秒</td><td>２００７０６２７
～
２００７１２２８</td><td>８３㎡</td><td>遺跡整備</td></tr>
<tr><td>所収遺跡</td><td>種別</td><td colspan="2">主な時代</td><td colspan="2">主な遺構</td><td colspan="2">主な遺物</td><td colspan="2">特記事項</td></tr>
<tr><td>小倉城跡</td><td>城館跡</td><td colspan="2">戦国</td><td colspan="2">建物跡・通路跡・整地層</td><td colspan="2">陶磁器（染付、白磁、瀬戸美濃、、渥美、常滑、備前）、かわらけ、鉄釘、板碑ほか</td><td colspan="2">本郭内郭部各所に石積み遺構を確認。北虎口に門遺構整定。</td></tr>
</table>

Ⅰ　発掘調査の概要

1　平成１７年度調査の概要

発掘調査に至る経緯は、報告Ⅰ、Ⅱと重複するため割愛する。平成１７年度の調査も郭１の中でのみ行い、いずれもトレンチを設定し８地点でおこなった。郭１は上下二段構成と成り、基本的に上段は下段に包括される。下段は１．３～２．２ｍの土塁と三箇所の石積み虎口を設け、上段も虎口状の出入口施設２箇所以上と２０～５０ｃｍ程の高さもつ低土塁がめぐり広義の郭構成をとる。ここでは便宜的に郭１上段郭と下段郭と呼び分け説明する。

第１地点は北虎口の石積みの覗いている両袖部分のトレンチである。第２地点は３号土塁と４号土塁が廃城後の開削により虎口状に開口した部分を利用して設けたトレンチで、土塁断面を観察する目的であった。第３地点は東虎口北側４号土塁中央部分のトレンチ、第４地点は、報告Ⅱに掲載した１号土塁第３トレンチを東西に拡張したものである。第５地点は、南虎口第１トレンチを袖側に拡張し、かつ虎口中央部分にトレンチを新設した。第６地点は北虎口から南西に郭１下段郭中心へ向かう通路部分で西側の上段部との段差のうち石積みの覗いている部分のトレンチである。第７地点は、報告Ⅱで上段第５トレンチとした部分の拡張トレンチである。第８地点は上段郭へ取り付く一折虎口の構造を把握するためのトレンチであった。

１７年度の調査面積は８３㎡で玉川村教育委員会から文化財保護法第 58 条の２の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会教育長宛提出し、平成１７年６月２７日から平成１７年１２月２８日まで調査を実施した。

2　発掘調査と報告書刊行事業の組織

平成１７年度　玉川村教育委員会

事　務　局
- 教育長　野口昌夫
- 事務局長　内室睦夫
- 教育総務係長　石川安司
- 社会教育係主任　田中伊久夫
- 教育総務係主任　田中和浩
- 教育総務係主事　落合麻美
- 発掘調査・整理報告書刊行担当　石川安司

平成１８年度ときがわ町教育委員会

事　務　局
- 教育長　清水孝一
- 生涯学習課長　須永文男
- 文化財係主査　堀口浩史

発掘調査・整理報告書刊行担当　石川安司

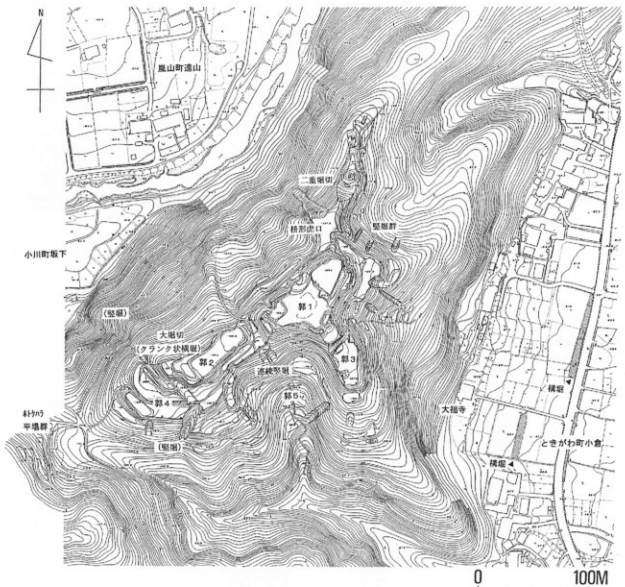
Ⅱ　地理的・歴史的環境

1　地理的環境（平成１６年度報文に訂正・加筆）

小倉城は比企郡ときがわ町大字田黒字城山に所在する。ＪＲ八高線明覚駅から北へ３．２ km、東武東上線武蔵嵐山駅から南西へ３km に位置し、嵐山町遠山、小川町下里の境界付近にあたる。

城跡は外秩父の山地帯と関東平野の境界にあり、大きく蛇行を繰り返す槻川と大平山（嵐山町）や正山（ときがわ町、嵐山町）の山地に囲まれる。その構造は、城山と山麓の大福寺の平場を主体とする根小屋を持つ可能性が高い梯郭式の山城で、大福寺前面の構掘、城山の南北を区切る谷、小倉集落を載せる段丘と槻川、更にその外側に広がる山稜などの地形を巧みに取り込むことにより幾重にも重なる同心円的に画された空間の中にある。正に自然地形を利用した総構的な景観を有する（小鷹 1936）（図１）。城からは、槻川の上流下里方面と下流（都幾川）の菅谷、鎌形、大蔵、唐子、松山方面の視界が良好に確保されておりこの城にとって繋ぎの位置的にある青山城をはじめ菅谷城や遥かに松山城（昭和 11 年頃）が目視出来たとされ（小鷹前掲書）山上からの視界は充分に確保されていた点は確認しておきたい。この城にとっては青山城と菅谷、大蔵、唐子を含めた都幾川（槻川）流域へ視界の確保がまず欠かすことのできない絶対条件であり、その為にこの地がわざわざ占地されていると解せよう。城は下流域（都幾川中流域）を極めて重視している。都幾川（槻川）の重要性は鎌倉時代以来、武蔵型板碑の石材搬出における動脈として機能してきた経緯があり、戦国期に至っても比企地方と南関東の物流を語る上で重要であった点にかわりはないと考えられる。従来小倉城は鎌倉街道など陸路上からはやや奥まった地点にあり同街道上の菅谷城－杉山城－高見（四津山）城に対し、設置理由がいまひとつ不鮮明であったが、鎌倉街道上道と山の根筋（現在の県道飯能－寄居線またはＪＲ八高線沿線ルート）の中間地域にあり双方にアクセス出来る点は戦国期東国主要街道の変移を想定する見解があり（齋藤 2005）重要である。この城は、槻川、都幾

第１図　小倉城跡周辺図



第２図　小倉城跡全測図

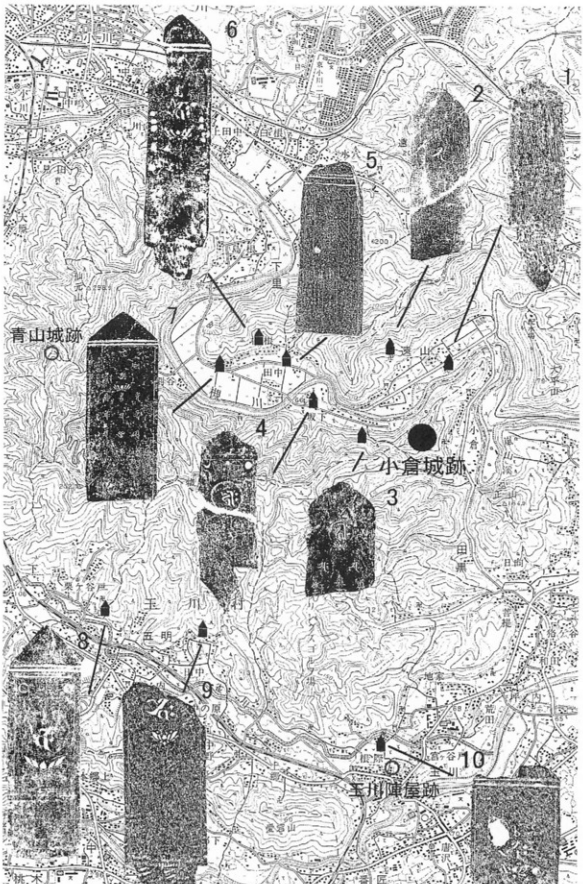
川ルートによる河川交通と合わせて鎌倉街道と山の根筋による陸路の掌握を担っていた。

２　歴史的環境

ここでは藤木久志が戦国期板碑により村の力量を読み解くとする視点を示したことを受け（藤木 2005）、また報告Ⅰ（石川 2005）にて小倉周辺の戦国期板碑の状況に触れたことから、再度戦国期板碑から小倉城周辺の戦国期村落について述べてみたいと思う。

板碑を歴史資料として分布論の中で使用する場合、移動したり本来存在したものが現在に伝来していないこともありその扱いには十分に注意する必要がある。ただし、この期の板碑には「待」に伴う民間信仰に関わり特徴的に造立された結衆板碑があり、その状況から、当時の寺院や主導した宗教者の活動状況を窺うことができ、ひいてはそれらを下支えした集落の存在やその構成員の一端を知ることが出来ると考えている。

まず、小倉城が所在する小倉集落には現在のところ戦国期の民間信仰板碑が確認されていない。周辺地域（図３）に目を転じてみよう。槻川を僅かに遡り隣接する遠山地区（嵐山町）では１付近で天文 12 年（1



第３図　小倉城跡周辺の主な戦国期板碑

543）銘の題目板碑が出土しており、その場所は日蓮宗寺院宗信寺の旧在地であるという。短絡的な推測は慎まなければならないが、比企地方での題目板碑の在り方は東松山市と東秩父村にまとまって所在する以外はそれ程多いものではない（諸岡 2005）。この付近に日蓮宗を信仰した人間がいたことを逆説的に示していると言えよう。上田氏やその家臣団との関わりが注意される。2は遠山寺の裏山に所在し、永禄11年（1568）銘釈迦一尊申待供養板碑が所在し１１名以上の名前が刻まれる。更に槻川を遡った小川町大字下里には、小倉城直下の坂下地区に、永禄10年代（1567～70）阿弥陀三尊板碑３と大永８年（1528）銘阿弥陀三尊月待供養板碑４があるほか、長禄、文明年間の２基の資料も所在する。また字寒沢には、長享２年（1488）銘阿弥陀図像月待供養板碑５（高 141cm）と戦国期の釈迦種子板碑断片、字愛宕山には紀年名は判読できないが、この期の 227cm を計る大型釈迦一尊板碑６が、字徳寿山には永禄９年（1566）銘十三仏板碑（高 151cm）７が所在する。下里地区は緑泥石片岩採石地を包括することにもよるが、前代より引き続きこの期としては旺盛な造立活動が指摘できる。瑞光寺跡、旧妙楽寺墓地、経塚などこの地区の宗教的景観を伺わせる地点に多く所在することから、主導した寺院や僧侶が存在した可能性もある。

一方、水系を替え南側雀川沿いのときがわ町大字五明に目を転じてみよう。8 は高さ 198cm を計る天文 24 年（1555）銘の釈迦一尊申待供養板碑で２６人以上の名前が刻まれる。偈には中古天台本覚法門との関わりを示す「本覚讃」が刻される（菊池 2005）。この資料の所在する円通寺には天文９年（1540）銘庚待供養板碑２基（内１基に本覚讃あり）、天文十一年（1542）銘釈迦一尊板碑、その他永正、文明年間の板碑４基が所在し多くの戦国期板碑が所在する。９は紀年名が判読できないが戦国期の完形であれば 170cm 前後の大型釈迦一尊板碑である。以上のように五明地区ではこの時期活発な宗教活動が展開されていたことがわかると同時に、碑面に現れる法名に「昌」を通字とする人々の存在とその配列や刻される文字の大きさから主導的立場の人物が存在したことが想定される。円通寺がその拠点であったのであれば、天台→臨済（ 永世年間以降 ）→曹洞（慶長年間以降）と宗旨がえしたことが知られ戦国期には天台・臨済の思想と関わりを持っていたことが予想できる。「本覚讃」の使用と主導に釈迦種子を刻む民間信仰板碑はそれらの現れだろうか。雀川を下った玉川地区には、龍福寺と慈眼寺に南北朝～戦国期の大型板碑が集中する。10 は現在、玉川陣屋跡に隣接する慈眼寺に所在する。蓮座以下を欠失し年代が不明ではあるが戦国期の板碑であり、幅は 53cm を計る大型資料である。

以上のように、戦国期の小倉城周辺には槻川に沿って下里・遠山、雀川に沿って五明・玉川の戦国期民間信仰板碑の盛んな造立が確認できる。勿論、確認できないところに集落が存在していなかったわけではないが、確認できる地区の周辺には積極的な宗教活動が展開されたことは間違いなく、それらを主導する僧侶や拠点となる寺院が存在していたことは推定できよう。換言すれば、そこには宗教活動に結縁し下支えした人々の確かな存在が示されており、集う人々の地縁・血縁的な範囲が問題となるが、これらの周辺に戦国期の集落が存在していたことは推測しても良いのではないだろうか。嵐山町山根遺跡やときがわ町玉川陣屋跡では発掘により戦国期の遺構や遺物が出土しており、それらの成果とのすり合わせや小倉城との関わりにおいて検討課題となる。

参考文献

小鷹健吾　1936『郷土玉川村史』
齋藤慎一　2005「中世東国の街道とその変遷」『戦国の城』高志書院
藤木久志　2005「戦国比企の城と村」『戦国の城』古志書院
諸岡　勝　2005「比企の題目板碑」『戦国の城』古志書院

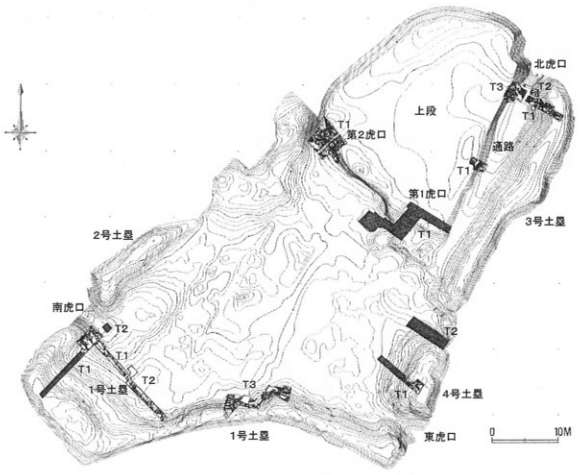
菊池大樹　2005「中世「文献」史料に見られるココロのあり方」『モノとココロの資料学』古志書院
小川町　1997『小川町の歴史』資料編３　古代・中世Ⅱ
嵐山町教育委員会　1990『嵐山町板石塔婆』
埼玉県教育委員会　1981『埼玉県板石塔婆調査報告書』

Ⅲ　遺構と遺物

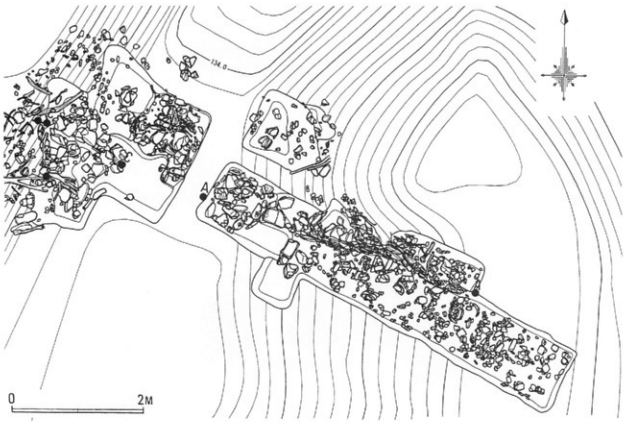
1　北虎口

郭１の北東部に開口し、東袖は従来より前傾した石積みが覗き、西袖も上部に石積みが僅かに確認できた。虎口の先は、西へ屈曲するスロープが取り付き、西袖には小さな折れが伴う。更にその先は下段の腰郭と続き枡形虎口へと至る。嵐山町杉山城跡の本郭から東二の郭へ至るルートが構造的に類似する。

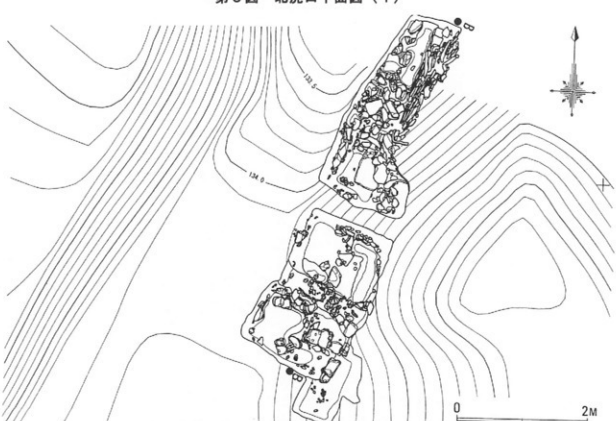
第１トレンチは、東袖側面部に設けたもので、平面的には袖部に取り付く土塁表面で砕石状の礫群が敷き詰められたように確認された。土塁内法の立ち上がりは 20 ～ 30 度程である。立面は、袖側面に沿って昨年度報告の南虎口と同様の石積みが確認された。確認状況では、石積みの立ち上がりが二段の雛壇状となるが当初からのものか崩落した結果かは未だ不明である。第２トレンチは袖正面に設けたものである。南端で大型の結晶片岩製方形板石が出土し門に伴う礎石と推定した。



第４図　平成１７年度郭１トレンチ配置図



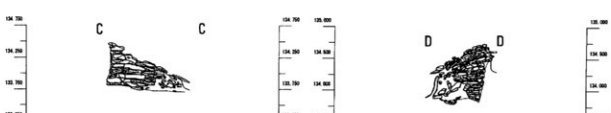
第５図　北虎口平面図（１）



第６図　北虎口平面図（２）

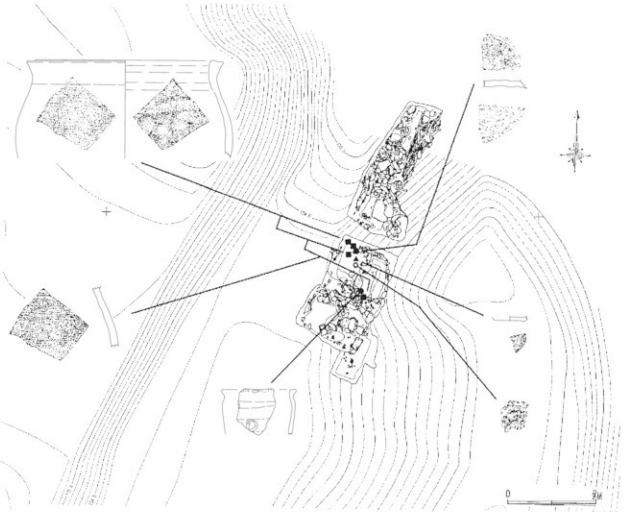
第７図　北虎口第１トレンチ東袖側面石積み立面図

第８図　北虎口東袖正面立面図

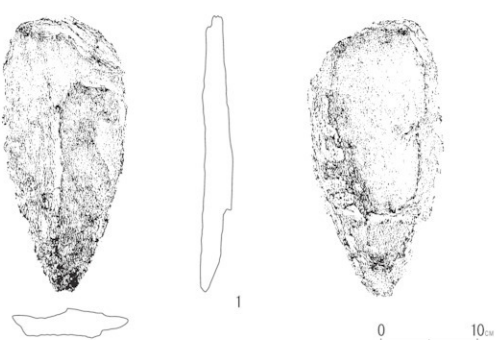


第９図　北虎口西袖突出部立面図（左）・通路部立面図（右）

また、最下層の礎石と同レベルで、礎石から南西方向の袖側面先端の大型石材に向かう配石列を検出している。ただし、袖先端はレベルを異にしており、配石列から見ると浮いた状態で、遺構の前後関係を示している可能性もある。第３トレンチは西袖に対して設定した。門などの遮蔽施設と関わる平面形が出枡形に曲がる石積みを検出した。また郭１中心部へ向かう通路の壁面を形成する石積みを検出したが、米松の根により現況は著しく歪んでいる。更に通路第１トレンチで検出した石積みへと続くものと考えられる。遺物は、東袖の第１、２トレンチで出土している。第 11 図の緑泥石片岩石材は、第１トレンチ表土直下で出土したものである。形状から板碑の未製品か又は製作途中の破損品であろう。砕石地を至近距離に控えるとはいえ緑泥石片岩自体に特殊な意味合いを感じていない限り、こと同質の結晶片岩系石材は当地にて賄うことが出来たことを考え合わせると、わざわざ持ち込んだものとは考えづらい。いずれにしても、城内又は極めて至近な地点で板碑石材の粗加工が行われた可能性がある。第 12 図は、いずれも石積み遺構の裏、謂わば芯に当たる部分の地形から出土したものである。この部分は結晶片岩の屑石と明茶褐色土を互層に積み上げて形成



第 10 図　北虎口遺物分布図



第 11 図　北虎口出土緑泥石片岩石材（板碑未製品・製作途中破損品）

北虎口第１トレンチ緑泥石片岩石材出土状態（１）

北虎口第１トレンチ緑泥石片岩石材出土状態（２）

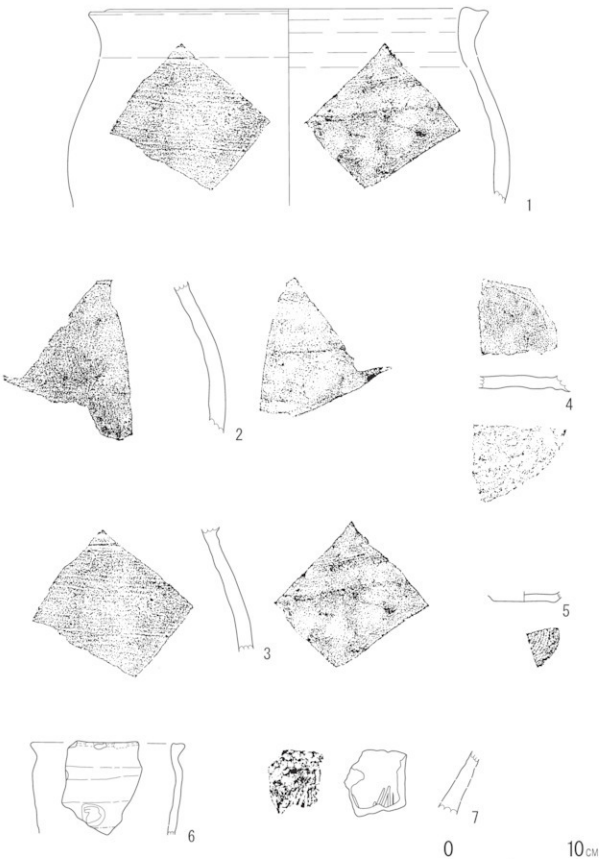
されている。１～３は同一個体の常滑甕で１が復元個体である。第２トレンチ最下層から口縁部が、肩部はそれよりやや上層から出土した。八王子城跡出土資料に近い観を受けるが、口縁内側は八王子例ほど尖らず先行する資料であろうか。常滑 11 ～ 12 期に位置づけられる。６は大窯１期の広口有耳壺である。少ないながらも、これらの常滑甕と広口有耳壺は石積み遺構の年代を考える資料となる。

２　通　路

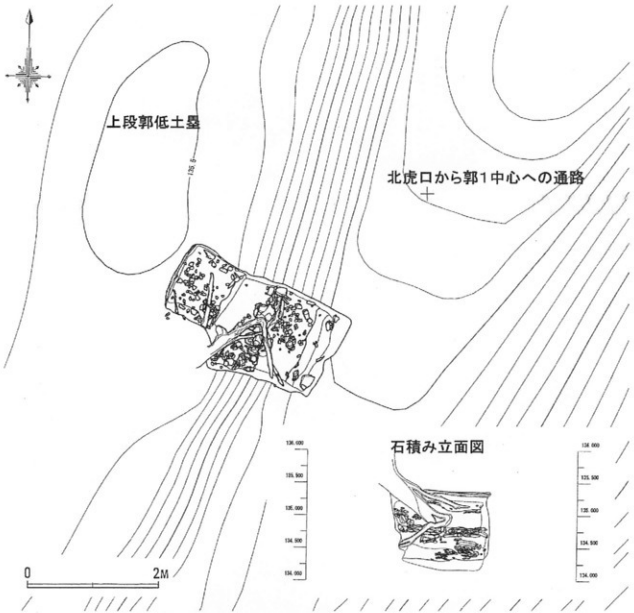
トレンチを１箇所設置した。北虎口から郭１中心部へ向かう部分は、３号土塁の裾と上段郭の立ち上がり壁面により、堀底道状の通路となる。基本的に直線道と考えられるが、北虎口進入直後はやや広く、郭１中心部分に近づくにしたがい窄まる構造である。石積みの施される西壁は現況で、石面が北虎口第３トレンチで確認された西袖基部の面とずれており途中に小さな折れを設けている可能性もある。通路から上段郭に向かって３石程度積んだ１段の石積みを確認した。石積みの下は岩盤を掘削整形して下段のステップとし、かつ石積みの基礎として使用する。上段郭部分は、表土直下に被災面があり大量の焼けた壁土が出土した。石積み上層から、大窯１期の擂鉢が出土している。

３　４号土塁

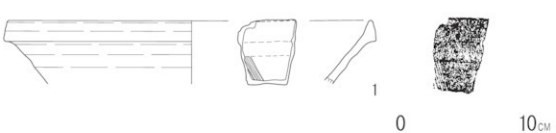
東虎口北側の第１トレンチと北端の虎口状に開削（近現代）された部分に第２トレンチを設定した。第１トレンチでは、土塁頂部に遺物を含む礫群により石敷き状の面が確認され、その面が被災していることが判明した。また土塁裾方向へは、途中で石敷きが途切れ黄褐色土の掘え付けとなる。立ち上がりは、２０度前後と緩やかで３号土塁と同様である。



第 12 図　北虎口出土遺物

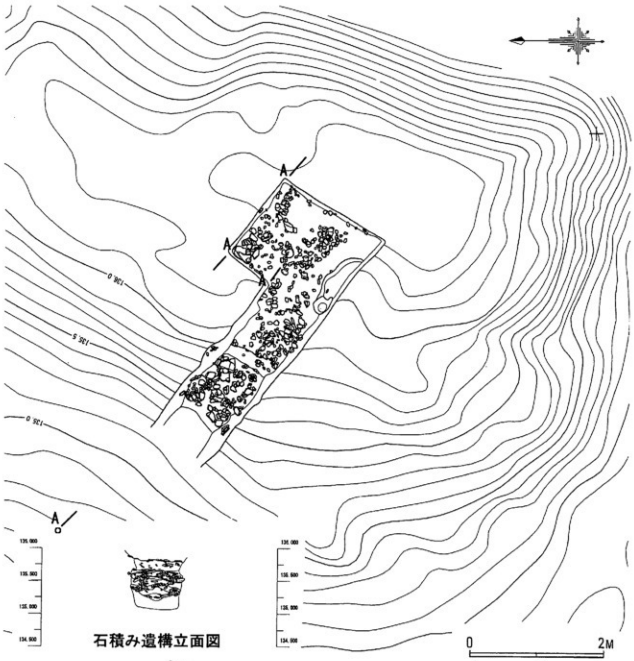


第 13 図　通路第１トレンチ平面図・石積み立面図



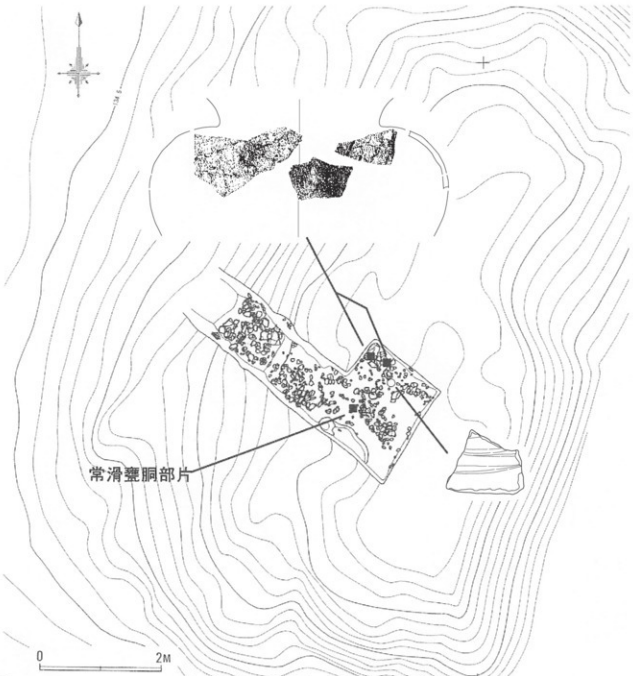
第 14 図　通路第１トレンチ出土遺物

石敷きの途切れるところは段となり、他の石積みと異なり小礫を無造作に詰め込んだような石積みである。その直下には硬化面が確認され、土塁中断の通路として使用されていたことが要約される。遺物は、１２世紀第三四半期の渥美大甕と風炉の胴部片が出土した。渥美大甕は、明らかに城の前段階の寺院など宗教施設に伴うもので、前年度まで調査していた郭１中央トレンチでも同一個体と



第 15 図　４号土塁第１トレンチ平面図・立面図

第 16 図　４号土塁第１トレンチセクション図

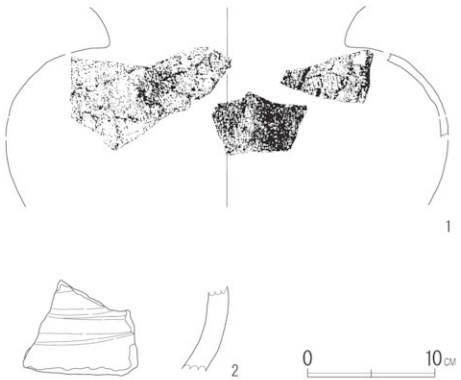


第17図　4号土塁第1トレンチ遺物分布

トレンチでも同一個体と思われる破片が出土しており、故意か否かは不明ながら本来1個体存在したものが破損後、結晶片岩の石屑と同じ意識のもと使用されたのがわかる。風炉の出土は注意されよう。第2トレンチでは、土塁の土層確認を主眼とした。その結果大きく4工程の積み上げが確認できる。これが時期差を現すかどうかは不明である。また崩落土中から丸火鉢の口縁部が出土した。前年度調査で同一個体の下部が出土している。

4　1号土塁

南虎口から東虎口へ柄杓形に続く土塁が1号土塁である。昨年度からの継続地点で入桝状に石積



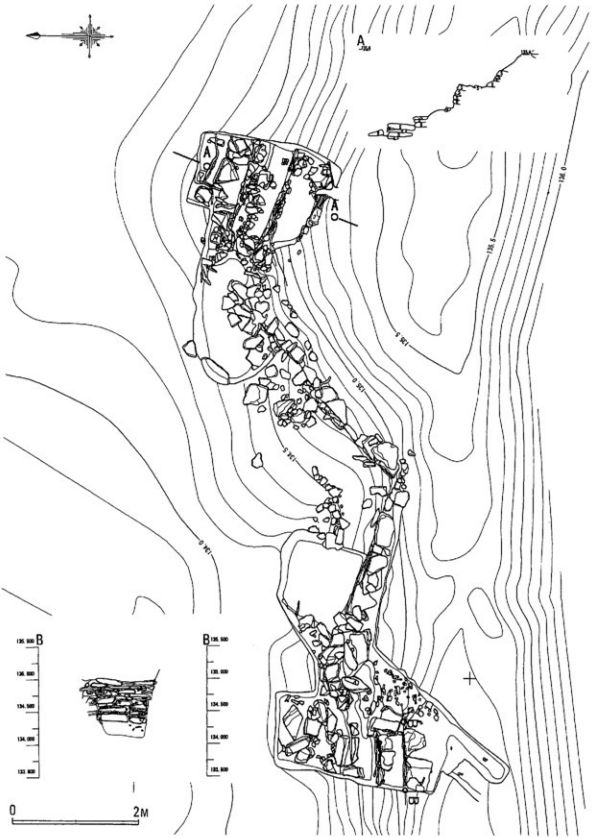
第 18 図　４号土塁第１トレンチ出土遺物

みを検出した後、南虎口と東虎口側へ拡張し延伸状態を確認した。結果、この部分で平面形が両側出枡で中心が入枡となる扉風折れ状の石積みが検出された。南虎口と東虎口へ続く両側は３段の雛壇状石積み、中心は昨年度確認した限りでは１段であったが上段に硬化面があり崩落している可能性もあろう。換言すれば南虎口と東虎口の双方から３段の雛壇状石積みが続きこの部分ですり合わされていると考えられる。３、４号土塁内法とは状況が著しく異なる。付随する通路を含め、求められた性格の差や或いは時期差と考えることも出来るが、北虎口と南虎口の最終的な構造がほぼ同様と考えてよく、さすれば時期差とするより、現状では目的や性格の差と考えた方がよいだろう。本年度の拡張部分では、遺物の出土は無かったが、昨年度の入枡部分の検出時に遺物が出土しており、補遺として掲載する。１は染付けＥ群碗の底部、２、３は常滑甕の胴部破片である。

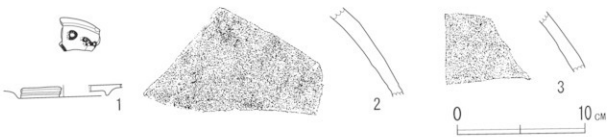
５　南虎口

昨年度に継続し雛壇状石積みの最下段下と袖正面、そして新たに虎口中央にトレンチを設けた。最下段では、緑泥石片岩剥片の集中面が確認され、また袖正面も大型石材の崩落が多い状況で、かつ中央部トレンチも思いのほかハイカーなどの通行が多く踏み荒らされるなどしたため、区切りの良いところで断念した。緑泥石片岩の剥片には未だ摩滅していないシャープな整痕が残されているものもあり板碑製作などに関わる資料と考えられる。小倉城内のいずれかで採石されたものかどうかは不明であるが板碑石材の採石地を至近に控えており注目される資料である。

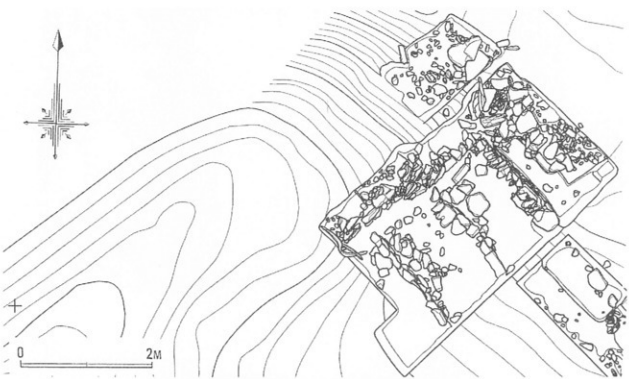
中央トレンチからは、表土直下の５～ 10cm ほど掘り下げたレベルから大窯２～３期の擂鉢と常滑甕の口縁下の頸部付近の破片が出土した。擂鉢の方は、内面の使用痕が顕著で特に見込みと立ち上がりの境付近が度重なる使用により釉の下の胎土が露出している。



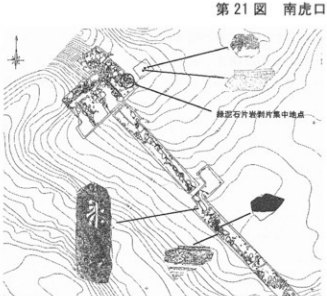
第 19 図　1号土塁第３トレンチ石積み遺構



第 20 図　1号土塁第３トレンチ石積み遺構出土遺物

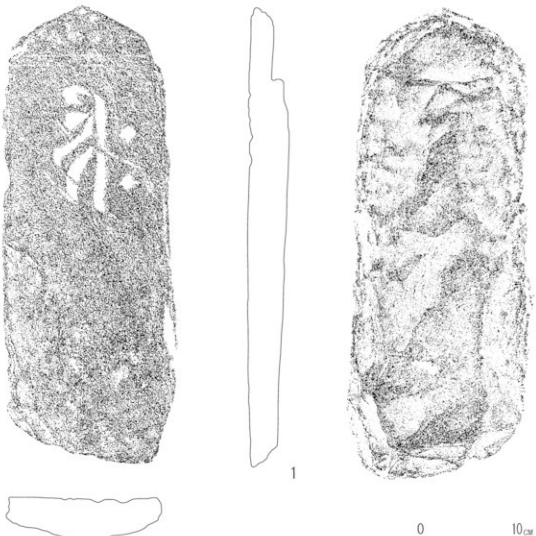


第 21 図　南虎口第１トレンチ



第 22 図　南虎口周辺遺物分布図

また、前年度調査で１号土塁第２トレンチで検出された石積み遺構の石材に板碑が転用されていた。南虎口の石積み遺構と一体性があるので、ここで補遺として、報告しておく。阿弥陀一尊種子で浅い線で二条線を刻むが、蓮座、枠線、紀年名等いっさい刻されない。阿弥陀種子は縦長で 13 世紀後半～ 14 世紀前半にかけてのものと見られる。ただし、側面粗く削り直角に整形することを指向するが剥離痕を比較的残す。裏面は、上半部に幅 1.5mm 前後の鑿痕を残す。全体として、厚みなどずんぐりとして粗雑な造りの印象を受ける。角火鉢と大窯期の徳利は前年度報告済みである。



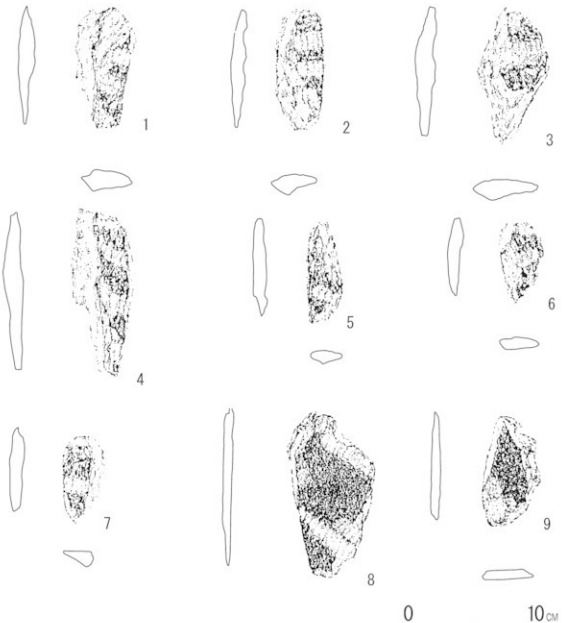
第 23 図　1 号土塁第 2 トレンチ石積み遺構出土板碑

南虎口第 1 トレンチ最下段で緑泥石片岩の剥片が集中する箇所を検出した。掘り下げ途中に担当者が気がついた段階では既にポリ 1 袋程度の剥片があがっていた。その時点で、鑿痕を有するものも確認できたため、板碑製作等に関わる可能性もあると考え面的な調査が必要と判断し、以下の掘り下げを断念した。埋没していたためか、鑿痕はシャープでこの部分のみ色調が異なる。1.3 ～ 1.5mm を計る。

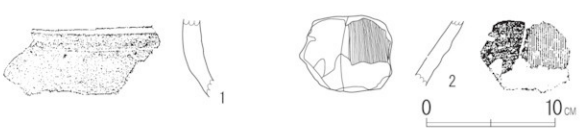
6　上段第 2 虎口

郭状の構成をとる上段の南西にあり低土塁がきれ、窪んでいたため、城郭研究者からは虎口等の施設が想定されていた。前年度袖部の石積みが覗いていたためトレンチを設け、染付 E 群の皿の出土を見た。トレンチを大きく拡張し出入り口施設の確認を試みた。

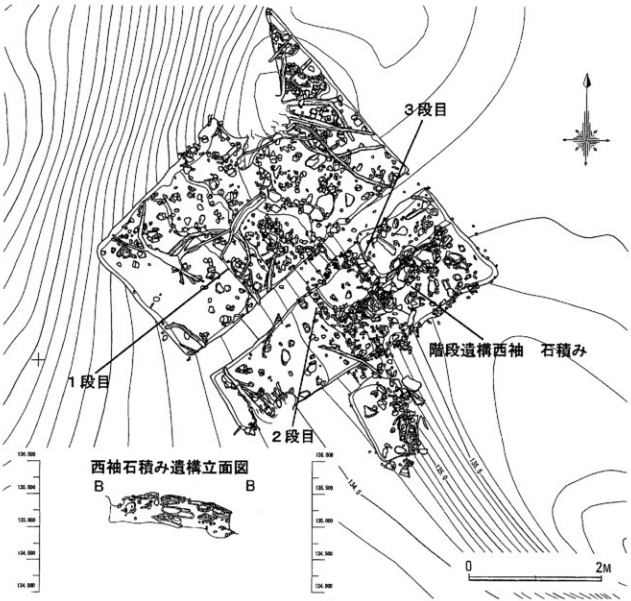
掘り下げの結果、遺存状態は悪いがステップ上に分布する 3 段の礫群を確認した。袖に石積みを伴う階段による虎口状の出入り口施設と判断されよう。名称は便宜的に第 2 虎口としたが将来的には変更する必要も有るかもしれない。前年度に確認された東袖に対応する西袖は米松の大木に阻まれ確認できなかった。また、ステップ面には一箇所大型石材が見られたが、元来礫敷きであったのか中・大型の石材によりステップが構成されていたかは不明である。



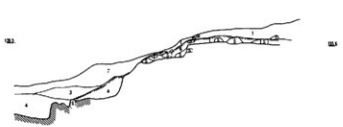
第 24 図　南虎口第 1 トレンチ出土緑泥石片岩剥片



第 25 図　南虎口第 2 トレンチ出土遺物



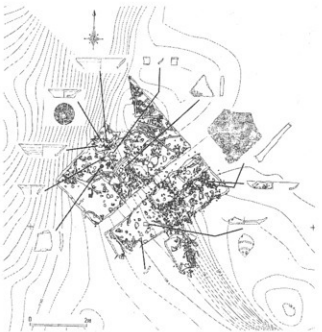
第 26 図　上段第２虎口階段遺構



1層	明茶褐色土	表土
2層	薄茶褐色土	ﾁﾗﾁﾗしてしまりなし
3層	暗茶褐色土	小砂利、小礫を含む
4層	茶褐色土	小砂利、小礫を多く含む しまりあり（段造成層）

第 27 図　上段第２虎口階段遺構セクション図

出土遺物は陶磁器類とカワラケがあった。１は染付Ｅ群の碗で底部外面に「宜」と「年」の文字が見られる。２は染付Ｃ群の口縁部小破片、３、４は白磁Ｃ群の碗である。５と８は大窯Ⅱ～Ⅲの徳利の口縁と胴部、６は在地産の擂鉢の破片である。７、９～１３はカワラケである。１２、１３は同一個体の可能性があるが小倉城跡出土のカワラケにはあまり見かけない、薄手できめの細かい精選された胎土をもつ。分布図に掲載した、染付Ｅ群の皿と常滑甕の底部付近の破片は、前年度出土

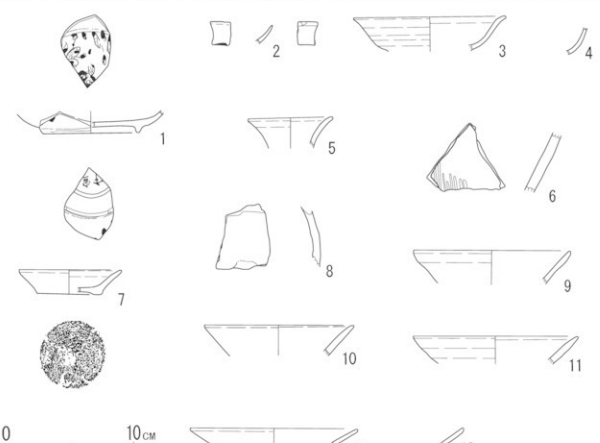


第 28 図　上段第２虎口遺物分布図

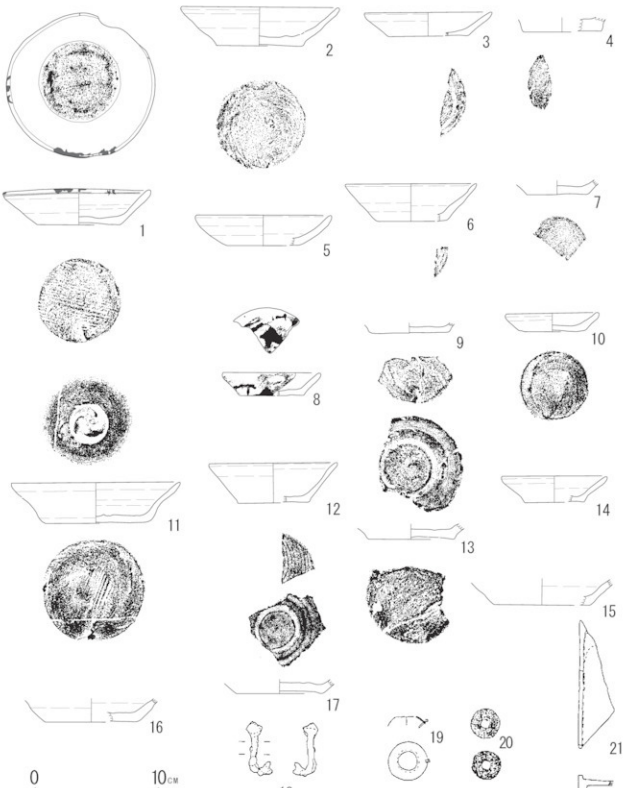
したもので出土位置的には東袖のさらに東側であった。その位置は石積みの裏側にあたるがレベル的には表土直下で石積みの造成土中であったかどうかは判然としなかった。

7　上段第１虎口

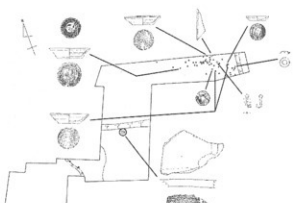
上段郭東南隅の南側に１０×５ｍの長方形の一段低い平場が取付く。現況で、この平場をよく観察すると西側から岩盤を掘削して窪め、通路状とした部分が見られる。また、上段郭の低土塁もそれに対応するように切れることから一折れして上段郭に入る虎口状の出入り施設を想定した。トレンチは進入路に沿ってクランク状に入れ上段郭東辺の石積み面にすりつけた。検出した遺構は、上段郭の南辺の縁に高さ２～３石分の石積みが検出され、東辺にも北虎口から続く通路壁面としての石積みが確認された。また長方形平場部分では西側で、岩盤を下位から見てＵ型に掘削し段をつけた階段状遺構の半分を検出した。なお上段の土塁がきれる部分のトレンチ内では遮蔽等に関わる遺構は確認できなかった。遺物は、上段部の東側に集中して出土し東辺に



第 29 図　上段第２虎口出土遺物



第 30 図　上段第 1 虎口第 1 トレンチ出土遺物



第 31 図　上段第１虎口遺物分布図

よった部分では被災の痕跡が確認された。第 30 図１１は、内底面中央に三巴の押印が有り、外底面中央のみに板状圧痕が見られる。このような、内底面に三巴の押印を持つカワラケは寡聞にして聞かないが、小倉城跡郭 1 では第１次調査に続き２点目である。ただし、第 1 次調査出土の方が、砂粒を多く含み胎土に違いを感じる。１３、１７は内底面に５ ㎜ 弱の棒状工具？で円形の沈線を入れる。１３は胎土中に１．５ ㎝ ほどの結晶片岩を含み産地とのからみから興味深い。１６は銅製品で用途や部位は不明。小さな銅釘で留めていた痕跡をもつ。１７は径２２～２３ ㎜ の銅銭で薄く、表裏とも無文のようだ。造りが悪いので当初から無文であったかどうかは分からないが、無文であれば、通常より一回り小さな径から無文銭と考えられる。

小　結

平成 17 年度調査のまとめを簡潔に確認し、合わせて関連する部分で過去の調査成果についても触れたい。まず、北虎口について礎石状の大型板状石材が確認され門遺構が想定される可能性が高まった。その年代は僅かな出土遺物ではあるが、大窯Ⅰ期の広口有耳壷と常滑 11 ～ 12 期の甕がポイントとなる。具体的には、いずれの遺物も破片となったものが石積みの芯に当たる部分に混入することを考えると、それらの遺物遺構が石積みの構築年代の目安となろう。遺構の検出状況からは側壁石積みの積み始めの高さと礎石－配石列・焼土面にレベル差があり上下 2 時期の遺構と解せる可能性もある。構造的には、石積みの平面形が通路面に対し出枡形に突出し門が取り付くのであろうか。東虎口の現況測量図には既に同様の平面形が観察され、南虎口で北虎口と同様の側壁石積みを確認していることから、東、南、北虎口で共通の形態、構造を持つ可能性がある。それは、取りも直さず最終段階の３虎口が同時性を持つこととなる。北虎口東袖の配石列内側で焼土面が確認されたことに絡み、郭 1 各所でも焼土面が確認されている。南虎口雛壇状石積みのステップ面、東虎口北脇の土塁頂部、上段郭東辺に関わる通路第１トレンチと第１虎口第１トレンチ東端、下段中央トレンチの 1 号建物跡がそれで、状況からそれらを現在すべて同時期のものとは考えづらいが城の変遷を考える重要な要素であることを指摘しておきたい。

年代に関しては、遺物総体としての年代から、その中心を１６世紀前半から後半と訂正しておく。その他、城の年代的な変遷を考えるポイントとして、下段中央トレンチ西端の整地層、郭３東外面の一括出土カワラケが挙げられる。また１号土塁と３号土塁の内法に形態差が認められた。それぞれ通路が付随し求められた機能や性格が異なることも考えられる。遺物としては内底面に三巴を押印する特殊なカワラケが出土している。遺跡の性格を読み解く重要な遺物となるかもしれない。

最後に板碑生産との関わりで、製作途中の破損品？や鑿痕を残す剥片の出土があった。郭４直下の仏原平場群には大量の板碑台石が散乱する場も所在する。板碑石材採石地は指呼の間であり、城跡内又は極めて至近地で生産に関わる何らかの行為が行われていた可能性もあろう。

図版 1

北虎口東袖側壁先端

北虎口東袖断面及び常滑甕出土状況

北虎口東袖側壁先端

北虎口東袖広口有耳壺出土状況

北虎口東袖配石及び常滑甕出土状況

北虎口東袖東西断面

北虎口東袖側壁先端・配石列・東西断面

北虎口東袖側壁先端・配石列・東西断面

北虎口東袖南北断面

北虎口東袖側壁先端・配石列・礎石

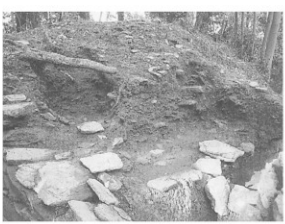
北虎口東袖配石列

北虎口東袖礎石

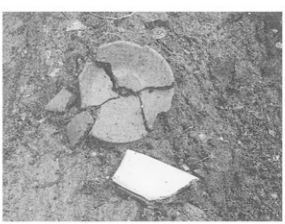
図版３

北虎口東袖礎石

本郭上段第２虎口階段遺構



北虎口西袖



本郭上段第２虎口階段遺構白磁・カワラケ

北虎口西袖

本郭上段第２虎口階段遺構染付

本郭上段第１虎口通路側トレンチ

第１土塁第３トレンチ石積み遺構

本郭上段第１虎口通路側トレンチカワラケ

第１土塁第３トレンチ石積み遺構

第１土塁第３トレンチ石積み遺構

第１土塁第３トレンチ石積み遺構

ときがわ町埋蔵文化財調査報告第１集

村内遺跡　Ⅲ

－県指定史跡　小倉城跡　第３次発掘調査報告書－

２００７年３月３１日
編集・発行　　ときがわ町教育委員会
印　　刷　　たつみ印刷株式会社